
リリカルなのはiF～最強の魔法使い～

canceler

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはiF（最強の魔法使い）

【Nコード】

N5474J

【作者名】

canceler

【あらすじ】

最強の魔法使いが登場するお話。
第一期からです。

第一話（前書き）

初の二次創作。

世界観などの違いがありましたらお教えください。
よろしく願います。

第一話

太陽の光が眩しい。

小鳥のさえずりが聞こえてくる。

いわゆる朝ってやつだ。

『マスター、マスター、起きてください』

「おう、ユリア。おはよう」

『おはようございます』

といっても辺りに人の姿は無い。それもそのはず。ユリアとは俺が使うデバイスの名前だ。左腕の手首から肘までを覆うような小手の形状をしている。

「それで、あれの解析は終わったか？」

『はい。つい先ほど終わりました』

「そうか、お疲れ様。夜通し頑張ってもらって悪いね」

『いえいえ、問題ありません』

「早速報告してもらおうかな」

『はい。昨日見つけた宝石はロストログア《悪魔の奇跡》。膨大な量の魔力と対価を払うことで持ち主の願いをかなえるものです』

「なるほどね。じゃあ今回もはずれだな。」

『そうですね。次の目的地に移動します』

「まだ探していないけど？」

『見つけておきました』

「さすがだ」

『当然です』

目を閉じ、左腕を前に出す。

「転移魔法」

『術式構築』

「魔力充填」

『座標確定』

「『発動』」

足元に魔方陣があらわれ、一瞬にしてその姿は消えた。

~~~~~

誰もいない公園に魔方陣が現れ、一人の少年の姿がでてきた。

『到着と。で、ここは何処？』

『はい。ここは地球という名の星で、文化レベルはB。魔法は存在しないところです』

「魔法が存在しないって、何でこんな……」

星を選んだのかと続けようとしたところで、不穏な気配に気づく。

「そういうことか」

『はい』

魔法の気配がする。二つ、いや、三つか。それにもう一つ……これは、

『ロストロギアですね』

「心を読むな。いくぞ」

『その前に』

「なんだ？」

『マスターの自己紹介をしてください』

「……」

『ここではないとたぶんずっと出来ませんよ』

「……オーケー。俺の名前はシング・ローカンナ。13歳。両親は不在。物心ついたときからいなくて、2年前まで師匠に育ててもらっていた。その師匠も死んでしまって、現在進行形で探し物兼一人旅中だ」

『正確には二人旅ですけどね』

「そうだな、お前がいるしな」

~~~~~

姿を魔法で隠した後、走って行ってシングが見たのは二人の少女だった。

一人は白色のバリアジャケットと桜色の魔力を持った子。

もう一人は黒色のバリアジャケットと金色の魔力と髪を持つ子。

ちょうど黒い女の子が白い女の子を吹き飛ばし、宝石のようなものを封印して去っていくところだった。

ちなみにシングはそばにある茂みの中に隠れている。

『タイミングを逃しましたね』

「ああ、ちよつと遅かったな」

『誰かが自己紹介なんてしてるせいで』

「……」

『とりあえずどうします？ 一度撤退すべきかと』

シングは「ん〜」と少し悩んだ後、

「とりあえず白い子に会ってみようか。怪我してるみたいだし」

『大したことはないと思いますが』

「かもしれないけどさ」

『「俺がもうちよつと早く着いてれば止められた」とでも言いたいですか？ お人よしですね』

「はつきり言うなあ」

『本当のことですから』

「確かに。じゃあ治癒魔法いくぞ」

そう言ってシングは左手を前に出す。

『わかりました』

魔方阵が現れ、少女に癒しを与え、傷を癒す。

「誰？」

イタチがこっちを向いた。

「ああ、はじめまして。俺の名前はシング・ローカナ。まあ通りすがりの魔道師ってことで。こっちはデバイスのユリア」

『よろしく願います』

「あつ、こちらこそ。僕はユーノ・スクライアです」

意外と礼儀正しいな、このイタチ。などとシングが思っていると、白い女の子が目を見ました。

「ん……あれ、ユーノ君。ジュエルシードは？ 私、あの子に……」

「あ、なのは！ 大丈夫かい？」

「うん。それで、どうなったの？」

ユーノが少女に説明をしている。

「……とういことで、彼がなのはを治療してくれたんだよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いやいや、気にしなくていいよ。怪我は大丈夫かい？」

「はい、全然平気です」

よかった。

「それじゃあ自己紹介からだね。俺の名前は……」

と言いつつユリアと念話。

（「嘘つき、自己紹介できるじゃん」）

（『ここで出来るのも先ほどしたおかげです』）

こいつが言うのと、正しいように聞こえるから怖い。

~~~~~

「なるほどね。あの宝石の名前は《ジュエルシード》。ユーノが輸送中にこの世界に落っこちてあまつさえ怪我までしたから、封印を高町さんに手伝ってもらってると」

あの後、彼女たちの事情を聞かせてもらい、高町さんの集めた4個のジュエルシードを見せてもらった。

「なんか僕が馬鹿みたいに聞こえるんだけど」

イタチ……ではなくフレットのユーノが言ってくる。

正確には輸送中に襲撃にあったらしい。

しかし、

「ただけいな」

「?」

俺の言葉にそろって首をかしげる二人。

「高町さん。一つ質問」

「何ですか?」

「このままジュエルシード集めを続けるのかい? 巻き込まれただけというならやめておいたほうがいい。今日も怪我をしたんだし、これから先もっと危険なことがあるのかもしれない。それでも君は続けるのかい?」

（『お人よしですね』）

（「うるさい」）

「私は……」

彼女は真っ直ぐに俺の目を見てきた。

綺麗な、澄んだ目をしている。

「私は、ジュエルシード集めを続けたいです。ユーノ君との約束もあるけど、私自身の意思でジュエルシード集めを続けたいんです」

「なのは……」

「わかった。じゃあ困ったことがあったらいつでも言ってくれ。助けになるよ」

「ありがとうございます」

そのときの彼女の笑顔はとても可愛くて、少し見蕩れてしまいそうだった。

（『ロリコン』）

（「4歳差だ」）

「あっあの、あなたはジュエルシードを集めないんですか?」  
ユーノが聞いてくる。

「ああ。俺のほしい物とは違うみたいだな」

「あの、ローカナさんの探してるものって」

「俺のことはシングでいい。探しているものはロストログア《精霊の眼》だ」

そう言って俺は転移魔法を発動させる。



「もう遅い、家に帰りなさい」

辺りを見渡すと、日が沈もうとしている。

「ほえええええ、もうこんな時間だよ」

慌てる高町さんを見つつ、俺は転移した。

~~~~~

『どうしますか。今回もはずれのようにですし、すぐに転移をしますか？』

場所は初めに転移した公園。

「どうして『どうせ答えはNOでしょ』みたいなトーンで言うんだ？」

『マスターの性格は熟知しているつもりです。で、どうしますか？』

「まあ、もう少し様子見かな。あのジュエルシード、すごい力の塊だった。下手したら次元震ぐらい簡単に起こせるぞ」

『本心は？』

ぐっ……

「あの女の子達、高町さんに金髪の子がちょっと気になる」

『ロリコン』

「そういう意味じゃないよ。高町さんは一般人だし、金髪の子はなんか危なげな雰囲気があったんだよな」

『ロリコン』

「……」

『まあいいでしょう。私の意見としては、二つ三つほど、ジュエルシードを持っておくのも悪くないと思います』

「そうだな。もう少し解析すればドライブカートリッジの作成にも利用できるかもしれないしな」

『はい』

一通り今後の方針について話した後、シングは眠りについた。
ちなみに方針は、

「争いは無し」のみ。
『今後が心配ですね』

第二話

この地に来てから数日が経ち、シングはジュエルシードを三つ手に入れた。

ジュエルシードを解析し、ドライブカートリッジの開発にも着手、テスト運用の必要はあるものの、試作品は完成した。

順調そうに見えるが、深刻な問題が一つ。

人間の生活に欠かせない三要素のうちの「食」である。

「腹減った」

『保存食も無くなりましたからね』

「死ぬかもしれない」

『そうですか。さようならマスター。あなたのことは忘れるまで忘れません』

「忘れたら忘れるのかよ」

『空腹で死んだマスター……むしろ早く忘れたいですね』

「酷い！ てかまだ死んでない！」

『すみません。どちら様ですか？』

「忘れられた!？」

……口論でこいつに勝つのは無理だ。

~~~~~

その日の夜。

「今回は外したな」

そう呟く俺の視線の先では、二人の少女、高町さんと金髪の子が向かい合って話していた……と言うより、高町さんが一生懸命何かを言っているだけに見える。

金髪の子はあまり反応を示さず、一方通行の状態だ。

割と遠くにいたので何言ってるかは聞こえない。それよりもマジ

で腹が減って限界が近い。

あっ、戦闘が始まった。

金髪の子はデバイスから魔力の刃を鎌みたいにだして、近接戦闘を、高町さんは魔力弾による中・遠距離戦闘をするが、如何せん金髪の子のスピードが速い。結果は高町さんの負け。ジュエルシードを一つ盗られた。

金髪の子はどこかに飛んでいく。

俺はそれを見つつあることを思いついた。

「ユリア、飛ぶぞ」

『嫌な予感がします』

「その予感正しい」

『まさかっ』

そのまさかだったりする。

俺は金髪の子の跡を追いかけて、

「おい！」

声をかけた。

金髪の子はびっくりしたようだが、すぐにこっちに振り向いて警戒した眼差しを向けてくる。

「ちょっといいかな？」

「何の用だい？」

その子の使い魔であろうオレンジの犬が、敵意剥きだしで言うてくる。

「そう噛みついてこないでよ。ちょっと話がしたいだけだからさあ」

俺がそう言っても警戒心を緩める気配は無い。

「あなたと話すことは無い」

結構ストレートに言ってくる金髪の子。

「まあそう言わないでよ。君はあの宝石を集めているんだろ？」

そう言ってポケットからジュエルシードを一つ取り出す。

二人の目つきが鋭くなる。

「そう怖い顔するなよ」

「それを渡して」

「人にものを頼む態度じゃないよね」

「渡さないのなら、力づくで奪う」

すごい話のかみ合わなさっぷり。

少女がデバイスを構える。使い魔は跳躍体制をとる。今まさに戦闘に入ろうとしたところで、

「だからこっちは戦う気なんぞこれっぽっちも無いっての。ほら、一個やるから落ち着けて」

俺はジュエルシードを少女に向かって投げた。

「えっ？」

少女は俺が何をしたのかわからなかったのか、反射的にジュエルシードを掴みはしたものの、戸惑いを隠せていない。

「何のつもりだい？」

使い魔が聞いてくる。

「別に理由なんかないよ。と言いたところだけど、本当は一つお願いがあってね」

~~~~~

（どうしてこんなことになっているんだろう）

フェイトは心の中で呟いた。

ここはフェイトの家。しかしいつもならアルフと二人だけの空間に今日はもう一人加わっている。

シング・ローカナだ。

彼がしてきた「お願い」とは、「ご飯を食べさせてほしい」というものであった。

何故そんなことを？　と思ったものの、ジュエルシードを貰った手前なんとも断りにくい。

幸いアルフが「ちゃんと食べないとバテちゃうよ」とかいって食べ物を買ってくるので、材料には困らなかった。（若干お

肉の割合が多いけど)

が、問題はその後。誰が作るかだった。

アルフは問題外。彼女のは調理とはいえない。

私は一応出来る。これでも切ったり焼いたり得意だ。

でも、お、男の人に作ってあげるのは、その、て、手料理ってことになって、は、恥ずかしいというか、なんというか……とつとにかく、そういうことだった。

残ったのはシング・ローカナ。一応客人という立場にあたるのだが、驚くことに彼は自分から調理を引き受けてきた。曰く、「ただ食べさせてもらうのは申し訳ない」らしい。(本来ジュエルシードを渡すこととの交換条件だったのだが)

意外にも彼は手馴れた手つきで調理を進めていった。

あつという間にリビングのテーブルに皿が並べられていき、アルフも目をキラキラさせている。

「出来たぞ」

「すごい豪華だね」

アルフ、はしゃぎすぎ。

「まあ、材料はそっち持ちだからな。結構使っちゃったけど、大丈夫か？」

「…大丈夫」

「さ、早く食べよう」

「そうだな」

「「いただきます」」

言うが早いのか、アルフはがつつき始めた。

「アルフ、恥ずかしいよ」

「あはは、ごめん。おいしくてつい……ほら、フエイトも食べなよ」
「うん」

パク。モグモグ……。

「おいしい」

「お口にあつたみたいで良かった」

「うん」

もう一口。

やっぱりおいしい。確実に私よりも。

……なんか悔しい。

そりゃ私は小さい頃から魔法の勉強ばかりしてきたから、家事とかはほとんどやらなかったし……

「……イト」

でも年の近い男の子に負けるのは……

「フェイト！」

！！

「なっ何？」

「どうしたんだい？　ボーっとして」

「なんでもない、なんでも……」

その後は少し話を（と言っても喋っているのはほとんどアルフと彼だけだ）した。

いつもは静かなこの部屋も今日は賑やかだ。

こんな空間も、その、悪くはない、かな？

「さて、今日はご馳走様。そろそろ帰るわ」

「帰るってあんた家なんて無いでしょ」

「そこまで世話になるわけにはいかねーよ。じゃあまたな。アルフ、フェイト」

あ……名前。

「じゃあね。シング」

「さ、さようなら」

そうして、彼は去っていった。

「ふう。シングの料理、うまかったね」

「……うん」

「ちよっと悔しかっただろ？」

！！

「あたしとフェイトは精神リンクしてるから、少しは分かるんだよ」
！！！！

「今度は負けないように練習しなきゃね」

ニヤニヤしながら言ってくるアルフ。

「アッアルフは私より下手なくせに。もうアルフなんて知らない！」
そう言って私はアルフに背を向けた。

「ごめんごめん。もう言わないから」

そんな声を聞きながら、私は密かに料理の練習をすることを決意した。

第二話（後書き）

第二話をお届けしました。

フェイトが登場。

性格が変わってるかもしれない……。

読者の皆様が多めに見てくれることを祈りつつ、今回はこの辺で。
戦闘シーンはまだ先かなあ。

第三話

（「ユリア、何故俺は第二話第三話と連続で死にかけねばならない??」）

（『次回からシリアスパートに入るからです』）

（「構想を練っている段階の癖に言い切ったな、おい」）

（『とりあえず、目の前のこれをどうにかしましょう』）

向かってくる桜色の砲撃を見つつ、俺とユリアはそんな会話をした。

そうなった理由を話すには、少し時間を巻き戻す必要がある。

~~~~~

朝、久しぶりの気持ちのいい朝だった。

理由は簡単、お腹が空いていなかったから。

昨晚、フェイトの家で日かぶりの飯にありつけて、いつも野宿している公園まで行くのがめんどくさくなって、偶然いい感じのひらけた場所を見つけたので、じゃあここで良いかなーと思っちゃったりしてそのまま寝てしまい……

「シングさ〜ん」

誰かに呼ばれた気がして目を覚ました。

ユリアではない模様。

女の子+俺の名前を知っている+フェイトの声じゃない

（「こんな回りくどい考えをせずとも目を開ければわかるんだよな」）

「あっ、おはようございます」

目を開けると高町なのはがそこにいた。

「……というわけなのです」

と言ってもどういいうわけかわからない人たちに説明。

彼女は毎朝フェレットの散歩と言って、家族に内緒で魔法の練習をしているらしい。

いつもこの場所で行っているのだが、

「今日はそこに俺が寝ていたと」

「はい」

「なるほどね。それで、俺に魔法の練習に付き合ってほしいと」

「はい、そうです」

「まあ、いいぞ。少しくらいなら」

「ありがとうございます！」

うれしそうな高町さん。

「じゃあ始めるか。あと敬語はやめてくれ。大して歳も変わらないんだし、高町さんの話し易い口調でいいよ」

「わかった。じゃあ私のこともなのはって呼んでほしいな」

……少し考える。

「わかったよ。なのだ」

「誰！？ 誰かの口調みたいだよ！ 私はなのは！」

「ごめんごめん。許してくれよ、なのな」

「それも誰かの口調！ そして元ネタ解らない人もいるよ！ 私は  
名前はな・の・は！」

「なんか言いにくいよ。噛みそうだよ」

「もう二回も噛んでるよ。うー、じゃあ今のままでいいよ」

「じゃあそう言うことで、なのは」

「にやっ、ちゃんと言えるじゃん！！」

「そんな事より魔法の練習しに来たんだろ」

「そうだった！」

（「からかい甲斐のある子だなあ」）

（『昨日の子とは随分対応が違いますね』）

（「フェイトはからかうと拗ねてそっぽ向く気がしたんだよ」）

「っでだ。魔法って言ってもいろいろな種類がある。いくつか言ってみて？」

「えっと……、この前ユーノ君が言ってた収束系とかのこと？」

「ああ、そういう細かいのじゃなくていい。ざっくり言って攻撃、防御、強化、移動、結界、治癒、みたいな感じかな」

（「大雑把すぎる」）

なんか馬鹿だと思われた感じがする。

（『実際思われたでしょうね』）

（「いちいち言わんでいい」）

説明を続ける。

「とりあえずなのは魔法のスタイルは遠距離からの砲撃だから、当たらなきゃ意味が無い。そうだろう？」

「うん。でも、この前あの子と闘ったときはほとんど避けられたり打ち落とされたりしたよ」

「まあ、そうだろうな。相手だってただ立って当てられるのを待っているわけじゃないもんな」

「そうだよね……」

少し落ち込むのは。

俺はゴミ箱の中から空き缶を2つ拾ってきた。一つを少し離れた地面に転がし、もう一つを魔法で浮かせる。

「じゃあ問題」

「ほえ？」

「今そこに転がっている空き缶と、俺が操っている空き缶、そこにある石を投げて当てるならどっちが簡単？」

「えとえと、転がってるほうが簡単かな？」

「どうして？」

「動かないから？」

『That's right, master』

「とりあえず俺の言葉だ」

レイジングハートに先を越された。

「つまり、動く相手なら動けなくしてやればいいこんな風に」

『捕縛』

ユリアがそう言うと同時に、飛んでいた空き缶の周りにリングがかかり、動きが止まる。

「こんな感じ、いわゆるバインドだ」

そう言っって小さな魔力弾で空き缶を吹き飛ばす。

「うわーすごい!!」

目をキラキラさせているのは。

「それくらい僕にも……」

ぶつぶつ言っているフェレット。

「まあ、初めはレイジングハートに補助して貰うといいよ。出来るね?」

『Of course』

と言うわけで練習開始。

さっきのように空き缶を飛ばしてなのはにバインドをかけさせる。

……内容を少しだけ紹介。

「ほらっ、次は三つ同時にだ。どれか一つはまだ中身が入ってるぞ!」

「にゃっ! 失敗したらかかっちゃうよ!」

「失敗しなきゃいい」

「スピード上げるぞ!」

「うー、目が回ってきたよ」

「スピード上げるぞ!」

「無視!?!」

「バインドしたものを打ち落とせ!」

「お願い! レイジングハート」

『A l l r i 「デバイスに頼るな!」

「酷いよ」

「もっと集中しろ!」

「わ、わかってるの!」

「なのは! 右!」

「ユーノ君うるさい!」

……こんな感じ。

『スパルタですね、マスター』

「馬鹿いうな。全然ゆっくりじゃないか」

そう、今の状況は敵の攻撃が無い状態だ。実践ではこうはいかない。

だから、

「最後に敵の攻撃があるのを想定する」

「まだ、やるの?」

「これが最後だ」

最後は俺が飛んで、少しだが攻撃する中においてバインドをかける練習。

「じゃあ始めるぞ」

「その前に、シングさんはセットアップしないんですか?」

小手の形をしているユリアを指差して訊いて来るなのは。

「ああ。ユリアはこの状態がセットアップ状態なんだ。待機モードはこうなる」

『待機』

ユリアの待機モードは腕時計の形。

「へー。じゃあバリアジャケットは?」

「俺はバリアジャケットは着ない。というか無い。その代わり別のものがあるんだけど、まあ今は関係ないさ」

そんなこんなで訓練開始。

「行くぞ。ユリア」

『わかりました』

「行くよ。レイジングハート」

『All right , master』

俺となのは同時に飛び上がった。

絶え間なく動き回る俺と動かずに杖を構えているなのは。

「よし、まずは攻撃をして相手を誘導、次の行動を読む事が出来たらバインドで動きを封じて……」

「ドカンだね」

「その通り」

……少しやってみたが、なかなかうまくいかない。

「うにゃゝ、難しいよゝ」

どうも一つの事に意識が向きすぎるみたいだ。

これは、攻撃を避ける事や相手の動きを読む事など、複数の事に意識を向けなければならない。

（『そろそろ終わりの方が良いでしょう』）

（「ああ、やり過ぎは良くない」）

そう思い、俺はスピードを緩めて練習の終了をなのはに伝えようとした。

伝えようとした。この言い方からもわかる通り、それは出来なかった。

何故なら、

「？　？バインド？」

俺の両手足に桃色のバインドが嵌められていたからだ。そして、

「ディバイス……」

なのはが魔力を収束させている。

「おい！！　？何打つ気だ！！」

聞いてる気配無し!!

「バスター!!!!」

そして、俺の視界は一面桜色で覆われた。

~~~~~

まあ、即刻でバインドを破壊して防御を張ったから無傷なんだけど問題は……

「やった〜!」

と、喜んでいる殺人未遂の現行犯……もといなのは。

……こいつ、自分のした事解ってない??

俺はなのはの将来が少々不安になり、

「練習で本気の一撃をぶっぱなすバカがいるか〜!!」
割りと本気で怒った。

「にゃっ、全然本気じゃないよ〜」

本気じゃないだ〜!! ? 末恐ろし奴だ。

その後、なのはに一通り魔法の危険性を説明してから別れた。

「あいつの将来が真剣に不安だよ。さっきの説明も納得いってないみたいだったし。まあ、もうちょっとうまくなるまで実戦では使うなって言っただけ……」

『私はフェイトさんの方が心配です』

「? ? どうして?」

『マスターならともかく、彼女がなのはさんの本気の砲撃に耐えられるでしょうか?』

……………

「最悪俺がなんとかするさ」

間に割って入るとか。

『応援してます』

「お前も来るんだよ」

第三話（後書き）

この後、なのはは学校で寝てしまい（魔法の練習がきつかったから）先生に怒られるけれど、その話は置いておくとして……

第三話、楽しんで頂けたでしょうか。

これから頑張りますので、どうかよろしくお願いします。

追伸

感想を書いてくださった方

ありがとうございます。

あなたの言葉で、私のやる気が何倍にも膨れ上がりました。
執筆スピードに影響を及ぼすことはないのですが……

でも、本当にうれしかったです。

これからもよろしく願います。

第四話

夜。

「アルフの奴、頑張るなあ」

『あれだけの魔力を使っていますからね』

「しかし……こんな街中で強制発動とは」

『一般人に被害が出たらどうするつもりでしょうかね』
そうこう言ってるうちに結界が張られた。

「この魔力は」

『ユーノさんですね』

「ということは、なのはもいるわけだ」

『戦闘になるでしょうね』

「だろうな」

『マスター、身体を張る時が来ました』

「決まったわけじゃないだろ」

なのはは手加減を知らない。

あの朝の魔法練習の時の感想だった。

いくらデバイスの方で非殺傷設定にしてあったとしても、言ってしまうと刃引きされた刀でも人を殴れば怪我をさせる事ができるように、絶対安全とは限らない。

そんな事になったら、フェイトの人生もなのはの人生も終わりだ。

『それを避けるためにも頑張ってください』

「おうよ。サポートよろしく」

『善処します』

「……不安が残る言い方だな」

『最善を尽くしたのですが……みたいな事言ってみたいですよね』

「言ってみたくない」

『何か、強い魔力の波動を感じます』

「切り替え早いな……ジュエルシードの発動か」

ジュエルシードは発動するやいなや二人に同時に封印された。

『お二人共優秀ですね』

「ああ」

二人の少女、なのはとフェイトがジュエルシードを挟んで向かい合った。

「この間は自己紹介できなかったけど…私、なのは。高町なのは。私立聖祥大附属小学校三年生」

なのはの言葉に、

『scythe form』

フェイトは金色の刃を作ることで返答した。

話すことは無いと。

でも、その瞳はすごく辛そうだった。

フェイトがなのはに襲い掛かる。

『フェイトさん、悲しそうですね』

なのはとフェイトの戦闘を見ながら、ユリアが呟く。

「……」

シングは何も言わない。

『そして、辛そうです』

「嫌な……」

『?』

「嫌な、本当に嫌な目だ」

『マスター』

「あいつは、フェイトは優しい子だ。一回話ただけでわかる。何であいつがあんな目をしなきゃいけないんだ」

『ジュエルシードを集めることと関係があるのでしょうか?』

「わからねえ。でも……」

『駄目です。これ以上関わりを作っては』

助けたい、と続けようとしたシングをユリアが制す。

「……」

『あれを、《精霊の眼》を見つけ出し破壊するまでは極力避けるべきです』

「……わかっている」

『本来ならばこの世界からも直ぐに立ち去るべきでしたのに……』
「すまん」

『謝られても困ります。でも、覚えておいてください。あれは……』
「わかっている！」

ユリアは止まらない。

それは、己がマスターの性格を知っているから。

『でも何度でも言います！ あれは、《精霊の眼》は……』

あなたを不幸にするために、

あなたの周りの人を、関わりのある人を不幸にします。

「ご自分の性格をご存知でしょう？ マスター、あなたは優しすぎる」

「……」

『今が、引き時です。これ以上関わらないうちに』

「……」

『ご決断を』

「……わかった。この戦闘が終了後、転移をする。次の転移先は？」

『もう確定しています』

だが、この決断は覆ることになる。

~~~~~

「フェイトちゃん!!」

なのはが叫ぶ。

その声に、フェイトが驚いた表情になる。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど……だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!!!」

なのはは続ける。

「ぶつかりあったり、競いあうことになるのは、それは仕方の無いことかもしれないけど……だけど、何もわからないままぶつかりあうのは、私嫌だ!!!!」

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれを元通りに集め直さないといけないから。私は、そのお手伝いで……だけど！ お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる!!! 自分の暮らしている町や、自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから！ これが、あたしの理由!!!!」

そのなのはの言葉にフェイトは、

「……私は」

「フェイト！ 答えなくていい!!!」

アルフの声が割ってはいる。

「優しくしてくれる人達のとこでぬくぬく甘ったれて暮らしてるよ。うながきんちよになんか何も教えなくていい!!! あたし達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ!!!」

その言葉に、フェイトはもう一度デバイスを構えなおした。

なのはもデバイスを構える。

次の瞬間、フェイトは下方にあるジュエルシードに向かった。

「あっ」

なのはも一瞬驚いただけで直ぐに後を追う。

たどり着いたのはほぼ同時。

二人は同時にデバイスをジュエルシードに突き出した。

——なのはとフェイトのデバイスがジュエルシードに触れる直前、魔力弾が彼方から飛んで来た。——

——それは、特別な感知システムを搭載しているユリアにしかわからなかったが——

デバイスがジュエルシードにぶつかる。

「えっ？」

声を出したのは誰だろうか。

誰かはわからないし、全員が出したのかもしれない。

唯一つはつきりしているのは、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、この四人はそれしか出来なかった。

動きが完全に止まっている。

二人のデバイスにひびが入り、壊れた。

「やばい!!」

シングは走り出す。

なのはとフェイトの下に。

ジェルシードが暴走し、巨大な爆発が起きようとしている。

二人は……いや、シング以外は突然のことに動けない。

なのはとフェイトは確実に爆発に巻き込まれてしまう。

助けなければ。

もう関わらないと決めたのに、体は動いていた。

しかし、

『このままでは間に合いません』

今のままでは間に合わない。

それなら、今以上の力を出せば良い。

「ユリア、ショートカット07をセット」

『試作品ですが』

「早く!!」

『……カートリッジセット完了』

「よし、ドライブカートリッジ、ロード!!」

『ファーストドライブ』

ユリアから通常のベルカ式カートリッジの1.5倍ほどの赤い葉が飛び出す。

その瞬間シングの身体は魔力に覆われた。

「高速飛行!!」

シングはさっきまでとは比べ物にならない速さで二人の下に飛んで行き、二人の腕をつかんでジュエルシードから離すように投げた。二人は反対の方に飛んで行く。

「ユリア、最大の防御を展開」

『はい、六連防壁を展開。座標を指定。数は』

「三枚ずつだ」

『…展開完了』

「上出来だ、ユリア」

『当たり前です』

「そして、すまん」

『謝る必要はありません』

「どうしてだ？」

『それは……』

「えっ？」

』

そして……爆発が起きた。

## 第四話（後書き）

第四話をお届けしました。

楽しんでいただけたなら幸いです。

この回と次の回で原作<sup>アニメ</sup>6話の後半〜7話の前半を描く予定です。

次回でフェイトがプレシアのもとに帰るところまでかければいいのですが……まあ、頑張りますのでよろしくお願いします。



## 第五話

何が起こったのだろうか。

確か、フェイトちゃんと戦っていて、

フェイトちゃんがジュエルシールドに向かって飛んで行ったのを追いかけて、先に手に入れようとして同時になって、

レイジングハートが壊れて。

その事で、頭が真っ白になって、

ジュエルシールドが光り出して、

誰かに投げ飛ばされて。

目の前にシールドが現れたと同時に爆発が起きて……

幸いにも張られたシールドに守られて怪我はしなかった。

でも、わからない事が。

私は誰に投げられたの？

もう一つ。

「レイジングハートが守ってくれたの？」

『…Sorry. …I couldn't』

ノイズ混じりの否定の声。

では、誰がシールドを張ったの？

ユーノ君だろうか、フェイトちゃん……の可能性は低い。

（「なのは!! 大丈夫!？」）

ちょうどその時ユーノ君の声がした。

（「私は大丈夫。ねえ、ユーノ君が守ってくれたの？」）

（「違う。僕じゃない」）

返ってくるのはまたしても否定の言葉。

では、誰が？

（「僕じゃない。彼が、シングさんが守ったんだ」）

シングさんが？

周囲を見渡しても姿が見えない。

（「何処にいるの？」）

（「彼は、なのはを庇ってジュエルシードの爆発に巻き込まれて……」）

その後、ユーノ君が何を言ったのかはわからない。

私は今見つけたものに釘付けになってしまったから。

それは、高層ビルの一つに大きな穴。

その穴はまるで人が突っ込んだみたいで……

「シングさん!!!!」

気がついたら、私は彼の下に飛びながら叫んでいた。

~~~~~

ビルの中。

「……………痛い」

『……………』

「超痛い」

『あの爆発を受けてそれだけで済むのがおかしいです』

あれだけの衝撃を受けたのにも関わらず、シングの体には目立った傷が無い。

せいぜいかすり傷程度だ。

ちなみに、シングはジュエルシードの爆発をモロに受けた。

ユリアが最後に張った六連防壁は、シングの前でなくなのはとフ
ェイトの前に張られたからである。

『まったく、無茶をして……』

「まあまあ。お前がバリアジャケットを展開してくれたからな」

『あれをジャケットと言っているのかはともかく、ほとんど消し飛
びましたしね』

「どんなものかはいずれ……」

「ああ、治癒を頼む」

『不可能です』

「……？ どうしてだ？」

『繊細な魔力コントロールが必要な治癒魔法はドライブモードでは
使用できません』

「なるほどな、そんな欠点があるとは……まあいい。ところで」

『本当です』

「読者にわかるように言え」

『はい。先ほど——なのはさんとフェイトさんのデバイスがジュエ
ルシードに触れる直前——《精霊の目》の魔力反応を感知しました』

「……続ける」

『おそらく、干渉かと。私見ですが、今までのものよりずっと小さ
なものです。ですから、今回の事で何かするというよりも、この先
もこの件に関してマスターを関わらせるのが目的かと』

「……どういうつもりだ？」

『わかりません。ただ、前言を撤回させていただくと、この件には
もっと積極的に動くべきです。《精霊の目》に近づくには奴の痕跡
をたどるのが最善です』

「……くく。ああ。そうしうか」

『嬉しそうですね』

「いやそんなことは無い」

『気分は良さそうですね』

「否定はしない」

『嬉しさ…罪悪感…悔しさ』(2+2)…5…1と言ったところで
しょうか。この件にもっと関われる嬉しさが2、《精霊の目》に近
づける嬉しさが2、なのはさんたちを巻き込んでしまう罪悪感が5、
奴の手の上で踊らされる悔しさが1ですね』

「……参りました」

『勝負はこれからです』

「勘弁してくれ」

『ちなみに嬉しさが全体の2／5ならば、嬉しそうでないという表
現も間違いではありませんね。マスターの発言も嘘ではありません
ね』

「ごめんな

——「シングさん!!」——

なのはの叫び声が聞こえる。

俺はこう思った。

なのは、無事だったか。よかった。

そして作者よ、この場合遮られるのは俺ではなくユリアの言葉だ
ろうに。

せめてあと二文字ぐらい言わせろよ。

~~~~~

なのはは俺の姿を見るなりすごいスピードで飛んできて、そのま  
ま抱きついてきた。

いわゆるフライングボディアタック。

ついでに額が鳩尾に。

「良かった! 無事だったんですね!」

ちよっと前までは無事だった。

「ああ、見ての通りさ」

致命傷だ。

（『漢なら絶えるのです』）

（「誤字のせいで嫌な意味に！」）  
痛みに耐える。↓死に絶える。

とりあえずなのはをどかすために、

「なのは、随分大胆だね」

（『セクシャルハラスメント！』）

「にゃっ！ ごごごめんにゃさい！」

ばっ！ と俺から離れるなのは。

恥ずかしさで顔が真っ赤だ。

（『これがマスターでなかったら』）

（『別のもので顔が真っ赤だろうな』）

主にヘモグロビンのなもので。

「あっあの、助けてくれてありがとうございます」

「いや、礼を言われることじゃないさ」

（『こちらのせいでもありますしね』）

本当にそうだ。二人の魔力だけならここまで酷いことにはならなかっただろう。

「そんなこと無いです!!」

強い口調で言ってくるなのは。

これを止めるには、

（『110番ですね』）

「そこまで言うならお礼にほっぺにチューでもしてくれや」

（『もしもし、警察ですか?』）

（「ちょっと待て、言う前に電話かけなかったか?」）

「ほええええええええええ!!」

（『ちなみに私に電話の機能はありません』）

（「ないんかい!」）

（『でもマスターのために回線をハッキングしてがんばります!』）

（「俺のためを思うなら止めてくれ! つーかお前にハッキング機

能はない!」)

あっ、なのはを完全に放置していた。

「キッキス、ほっぺ、ど、どうしよう、えとえと、」  
なにやらパンク寸前の様子。

「なのは」

「はいっ」

びくっと体を震わせて目を瞑りほっぺたをこちらに向けるなのは。  
……………俺がするのかよ。

なんとなくてこピンの刑。

「ていつ」

「あうっ。痛いよ」

「さっきのは嘘だ」

「ほえ?」

「今は気分がいいからお礼はいらない」

俺はビルに開いた穴の方へ歩きながらさういう。

怪我はなのはと話しているうちにドライブモードが切れたので治した。

「あのーそれは気分が悪かったら本当にさせられたということでしょうか?」

「はは、どうだろうな」

『誤魔化しましたね』

「うるさい」

「その、私は、ほっぺなら…………でも…………」

自分の世界に入ってるなのははおいというて、

「ああ、本当に気分がいい。だから…………気分が悪くなるようなことしてんじゃねえ!」

俺は全力で飛び出した。

何処へ?

決まってる。

バカなことしてる奴の下へだ。

「し、シングさん！ 私、キスしますってあれ？」

~~~~~

ものすごい衝撃だった。

誰かに飛ばされて何とか無事だったけれど、あれはいい……

「フェイト！！ 大丈夫かい？！」

誰だったのか考えているとアルフが飛んできた。

「うん。大丈夫だよ。アルフが守ってくれたの？」

「違うよ。あたしじゃない。シングだよ」

え？

「アルフ、どういうこと？」

「そのままの意味さ。あいつ、フェイトを庇って、自分の前には防壁一つ張らないで……」

私の前に張られた三枚の防壁は、シングが……

私はすぐにシングのもとに飛んでいこうとして、

——「シングさん！！」——

白い魔道士が叫びながらシングの下に飛んでいくのが見えた。

動きが止まった。

なんというか、行きにくい。

「あいつ、白い奴の仲間だったのか」

アルフが敵意をむき出しにして言う。

「そっそれは無いよ。ジュエルシードをくれたんだし」

考える前に口に出た否定の言葉。

「それもそうだね……しかし、あいつ無事かな？」

「分からない」

「あいつの所に行かないのかい？」

「……行かない」

「ふっふん」

……

「なにが言いたいの？」

「いや、なんでもないよ」

アルフはニヤニヤしている。

「……」

「睨まないでくれよ！」

「別に睨んでないよ、睨まれる様な事をしたの？」

「私が悪かったって」

……何か忘れてる。

あつ、

「「ジュエルシード!!」」

まだ、地面の近くにあった。

今なら邪魔をされずに封印できる。

でも、バルデッシュが壊れている今、どうすれば……

一つ方法が、

私はそれを実行すべく、

「バルデッシュ、戻って」

バルデッシュを待機状態に戻してジュエルシードを素手でつかんだ。

デバイスなしでの直接封印。

これしかなかった。

「フェイト!!」

アルフが心配そうに叫ぶ。

大丈夫だよ、これくらい。

母さんのためにも一つでも多くてにいれなきゃ。

「ぐっ」

さすがにきつい。

余波でバリアジャケットのマントが吹き飛んだ。

手が痛い。

がんばらなきゃいけないのに……

ジュエルシードから手が離れそうになる……

「気分が悪くなるようなことしてんじゃねえ！」

その手に誰かの手が重なった。

こんなときなのに、その手の温かさに不思議な気分になって、顔を上げると、

「シング？」

「ああ」

「どうして？」

「いいから、今は封印に集中しろ」

「……うん」

封印できたことが分かると同時に私は気を失った。

第五話（後書き）

大変長らくお待たせしました。

言い訳はしません。

第五話です。

ここから少しずつ展開を変えていこうかと……
がんばります。

感想などをお待ちしております。

これからもよろしくお願いします。

ちなみに次回、シングの戦闘がある

はず！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5474j/>

リリカルなのはiF～最強の魔法使い～

2010年10月12日06時23分発行